総　括

神野藤　昭夫

今年の国際日本文学研究集会は、二日間で、百五十人に及ぶご参加をいただきました。ただいまのボート先生のご講演に、十一人の方の研究発表、さらにポスターセッションでは、六人の方に発表をしていただきました。

昨日のポスターセッションは、日本文学研究の分野では、おそらく最初の試みでありまして、発表時間も質疑を加えてわずか十分と短く、はたしてうまくゆくだろうか、と正直なところ案じておりました。しかし、お聞きいただきましたとおり、後のレセプションでの交流も加えて、第一回目といたしましては、大成功でございました。今後は、若い方々の研究を支援する場として、さらに工夫を加え、本集会の特色に育ててゆきたいと考えたしだいです。

さて、今年は、テーマを「海外から見た日本文学の研究」、サブタイトルを「内と外をのりこえて」といたしました。このテーマとサブタイトルの組み合わせには、ちぐはぐな印象をうけた方もいらっしゃるかもしれません。メインテーマは「海外から見た日本文学の研究」でありますが、もはや日本文学研究に、内も外もありはしない。今や内とか外という発想をのりこえてゆかなければならないだろう。そういうメッセージをこめたつもりであります。

折しも、本館も、独立行政法人となり、日本に座り込んで国際研究集会を開催するだけではなく、館じたいが、国際的な場に出ていって、日本文学の研究集会を開催するという新しい時代に入っております。朝日新聞にもとりあげられましたけれども、この十一月には、ソウルで、国文学研究資料館が日韓の研究交流会を開催いたしております。まさに「内と外をのりこえて」ということであろうかと思います。

日本近代の国文学は、その学問的意義を、日本のアイデンティティを明らか

にするというナショナリズムに深く彩られた学問として出発いたしました。近代化という実学優先の時代に、時代遅れの学問をナショナリズムを標榜し、そこに学的意義と目標を掲げることによって、近代国文学なるものは成立したわけであります。

当然のことながら、そこで捉えられてくる日本文学像は偏りを孕まざるをえなかった。しかしながら、多くの日本人は、そういう偏りを偏りとして自覚しないまま、近代が線引きした日本文学像を抱えて今日に至っているわけです。

今回の「海外から見た日本文学の研究」は、そのような近代の自己限定的な日本文学像をより大きく摑みなおすとともに、国際的な視点から眺めるならば、新たな研究の沃野が豊かに広がっていることを示すような発表があいついだのが、大きな収穫であったと総括できるかと思います。

と同時に、それは、一九七五年以来、二十九回に及ぶ本研究集会の歴史の反映でもありますが、来年は、三十回という節目を迎えることになります。本集会が、今後とも日本における日本文学研究に衝撃を与える、大きな役割を果たす場として発展いたしますよう、皆さまのさらなるご支援をお願いいたしまして、総括のご挨拶にかえさせていただきます。